

2023 年度

修士論文題目

関連圏からのデカルト圏の普遍的再構成

学生証番号 45-216034

フリガナ ミノウラハルヤ

氏 名 箕浦 晴弥

Contents

1	Introduction	3
1.1	記法	5
2	関連圏	6
3	構成 Λ の定義	9
3.1	中間構造 $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の構成	10
3.2	圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ の構成	13
3.3	$\Lambda(\mathcal{R})$ のデカルト圏構造	19
4	構成 Λ の普遍性	23
5	モノ射の成す関連圏からの復元	27
6	まとめと今後の課題	28
7	謝辞	29
8	Reference	29

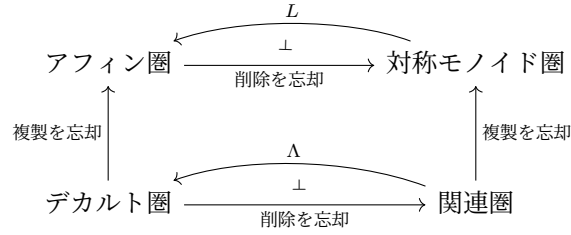
§ 1. Introduction

対称モノイド圏論は、ホモトピー論を出自として MacLane により創始された ([Mac63])。モノイド圏論では、圏に函手的なモノイド演算が乗った構造であるモノイド圏を扱う。対称モノイド圏論は、その中でも特にモノイド演算が (同型を除いて) 可換な対称モノイド圏を扱う分野である。これは直積でない「積」と呼ばれるもの、例えばテンソル積やスマッシュ積などの一般化である。

対称モノイド圏論は、圏論の中では比較的弱い構造を扱う理論である。他の圏論の多くの分野、例えばトポス理論やアーベル圏論では、全ての有限直積があること、即ちデカルト圏であることを前提として、その上にさらに構造を加えていく。対照的に、対称モノイド圏論においてはデカルト圏が最も強い構造である：対称モノイド圏に構造を付加してデカルト圏より強い構造になるならば、それは単にデカルト圏の理論で扱えばよい。即ち、対称モノイド圏論とは「対称モノイド圏とデカルト圏の中間構造たちを調べる分野」であると言える。

対称モノイド圏とデカルト圏の中間構造として、関連圏 (relevant category)・アフィン圏 (affine category) ([Jac94], [Pet02]) が挙げられる。そもそもデカルト圏とはどのような構造であったかという、対称モノイド圏 \mathcal{C} と自然同型 $\varphi_{X,Y} : \mathcal{C}(-, X) \times \mathcal{C}(-, Y) \cong \mathcal{C}(-, X \otimes Y)$ であってモノイド構造と整合的なものの組 (\mathcal{C}, φ) である。この普遍性を用いた定義は、次のような定義と等価であることが知られている ([Fox76])。すなわち、デカルト圏とは対称モノイド圏 \mathcal{C} 及び2つの自然変換「複製」 $\Delta_X : X \rightarrow X \otimes X$ と「削除」 $!_X : X \rightarrow I$ の組 $(\mathcal{C}, \Delta, !)$ であって整合性の条件を満たすものである。ここで I は \mathcal{C} の単位対象である。この定義を見ると、デカルト圏とは対称モノイド圏に「複製」射と「削除」射を付加した構造と見なせる。すると中間構造として、対称モノイド圏に「複製」のみ、あるいは「削除」のみを付加した構造が考えられる。これがそれぞれ関連圏・アフィン圏である。関連圏には例えば集合と単射の圏 Set^{mono} や点付き集合の圏 Set_* などがある。アフィン圏には例えば凸空間の圏 Conv ([Jac10]) や混合量子状態の圏 CPTP ([HS19]) などがある。

これら中間構造を調べることは対称モノイド圏とデカルト圏の関係性を調べるのに有用である。例えば、与えられた対称モノイド圏 \mathcal{M} から普遍的なデカルト圏 $CC[\mathcal{M}]$ を構成する問題 (直積を付加する問題) は、与えられた対称モノイド圏 \mathcal{M} から普遍的な関連圏 $RC[\mathcal{M}]$ を構成する問題 (複製を付加する問題) と与えられた関連圏 \mathcal{R} から普遍的なデカルト圏 $CC[\mathcal{R}]$ を構成する問題 (削除を付加する問題) とに分割できる。実際アフィン圏については、アフィン論理への関心も相まって多くの研究がある ([Jac10], [HS19])。しかし、関連圏についてはまだ調べられてこなかった。



本論文では、関連圏について調べる足掛かりとして、デカルト圏との関係を調べることを試みた。具体的には、関連圏がしばしばデカルト圏の関連部分圏として構成されることに着目し、逆に与えられた関連圏がどのようなデカルト圏のよい関連部分圏となるのかを調べた。結果、次の事実を得た：任意の関連圏に対し、それをよい関連部分圏に持つデカルト圏は存在すれば一意である。さらに全ての関連圏に対して、そのようなデカルト圏が存在するかどうか、また存在すればそれがどのようなデカルト圏であるかを計算する方法を与えた。

本論文で主に扱うのは、与えられた関連圏からそれをよい関連部分圏に持ちうるデカルト圏を構成する普遍的な操作 Λ である。操作 Λ は、あらゆる関連圏 \mathcal{R} に対してデカルト圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ 及び函手 $H_{\mathcal{R}} : \mathcal{R} \rightarrow \Lambda(\mathcal{R})$ の組 $(\Lambda(\mathcal{R}), H_{\mathcal{R}})$ を1つずつ返すものである。この $H_{\mathcal{R}}$ は必ずしも単射的 (即ち忠実かつ対象上本質的に単射) であるとは限らないが、もしも \mathcal{R} が何かデカルト圏 \mathcal{C} のよい関連部分圏として構成されているときには、必ず $\Lambda(\mathcal{R}) \cong \mathcal{C}$ である。特に、 \mathcal{R} をよい関連部分圏に持つデカルト圏 \mathcal{C} は同型を除いて一意であることが従う。さらにこの操作 Λ は、関連圏からデカルト圏を構成する方法として普遍的である。全てのデカルト圏は自然な方法で関連圏と見なせるが、この忘却操作に対して Λ は左随伴である。

Λ -construction の着想の説明をする。関連圏からデカルト圏を作る方法は「削除を追加する」ものであるはずだから、対称モノイド圏からアフィン圏を作る方法に一致するか少なくとも類似するはずである。後者は実際に知られていて、対称モノイド圏から、アフィン圏を作る (左) 普遍的な構成が [HT12] の系として得られている ([HT12], [HS19])。この普遍的な構成、L-construction (named by [HS19]) は、与えられた対称モノイド圏の射を余分に増やしたのち適切な同値関係で割る構成である。特にモノイド単位対象への射を全て同一視するような同値関係で割るので、モノイド単位対象が終対象になる。標語的に言えば、L-construction は「対称モノイド圏の単位対象を終対象にする構成」である。L-construction は関連圏に施しても一般にはデカルト圏にはならない。例えば Set^{mono} は素朴な方法で関連圏の構造を持ち、 Set^{mono} に L-construction を施して得られる圏 $L(\text{Set}^{\text{mono}})$ は Set と非同型であるが、 $\Lambda(\text{Set}^{\text{mono}}) \cong \text{Set}$ である。L-construction 及び Λ -construction の普遍性を踏まえれば、 $L(\text{Set}^{\text{mono}})$ はデカルト圏ではないことがわかる。 $L(\text{Set}^{\text{mono}})$ は Tennent category ([Ten90]) と等しい ([HT12], Thm4.4) ことが分かっている。

構成 L は対称モノイド圏のモノイド単位対象を終対象にするものであったが、上に述べたようにテンソル積を直積にするものではなかった。これに対して 構成 Λ は、関連圏を受け取り、その

モノイド単位対象を終対象に、テンソル積を直積にするものである。

関連圏から左普遍的な デカルト圏を得る方法は複数考えられるが、他の方法では今回のように実際の挙動を計算することは難しい。関連圏やデカルト圏は等式的な形式体系を用いた定義をされていると考えられるから、例えば [Lam72] のように必要な対象と射をすべて追加したのちに適切な同値関係で割るという構成を考えることができる。しかしこの方法では対象や射の形は非常に複雑になるため、具体例での振る舞いを計算することは難しい。またこの方法で本論文と同様の結果を示そうとした場合、結局構成 Λ の普遍性を証明するのと同様の補題を要することになるように思われる。他にも、随伴函手定理を用いて関連圏からデカルト圏への（忘却に対する）左随伴函手を構成するという方法が考えられるが、これにもまた困難がある。今回は圏から圏を作る構成を与えており、それを一般的な理論で得るためには 2-圏論的な随伴函手定理が必要である。しかし 2-圏論で強い随伴に関する主張をする文献は調べる限り未だなく、現状この普遍的な構成を得ることはできない。一方で、2-圏論的議論を避けるために strict なデカルト圏と strict なモノイド函手から成る 1-圏について議論しようとする、この圏は一般には等化子を持たず、(1-圏論の) 随伴函手定理の適用外となる。このように、関連圏からデカルト圏を構成する方法はいくつか考えられるが、関連圏からデカルト圏を構成する方法としては本論文で与えた構成 Λ が最も有効であると考えられる。

本論文では、関連圏 (relevance category) の定義及び基本的な例を述べたのち、関連圏の「デカルト圏化」操作である構成 Λ を記述し、 Λ の普遍性、及び Λ が Set^{mono} から Set を復元する性質を持つことを証明する。

§ 1.1. 記法

本論文では簡明さのために、圏の射の合成の記号として \triangleright を用いる。 $f \triangleright g := g \circ f$ である。すなわち、この記法では射の合成を図式を読む順番と同じ順番で書くことになる。古くは情報系の文脈では合成を $f; g$ と書く文献もあるとされる ([BW90]) が、数学では大変分かりにくくなるためこれを避ける。

また、モノイド圏の図式の記述に際して、煩雑さを避けるため、結合律の同型 α によって結ばれる対象同士は記号の濫用によって同一視し、 α は明示しない。

加えて、図式中の射の表示に際しては、簡単のため $id_A \otimes id_B \otimes f \otimes id_D \otimes id_E$ を $AB \otimes f \otimes DE$ のように記述する。

§ 2. 関連圏

Introduction で述べたように、関連圏とは対称モノイド圏 \mathcal{R} に「複製」 $\{\Delta_X : X \rightarrow X \otimes X\}_{X \in \mathcal{R}}$ を付加した構造である。関連圏は対応 $\mathcal{R}(Z, X) \times \mathcal{R}(Z, Y) \rightarrow \mathcal{R}(Z, X \otimes Y); (f, g) \mapsto \Delta_Z \triangleright (f \otimes g)$ を伴うから、関連圏は対称モノイド圏 \mathcal{R} に自然変換 $\{\mathcal{R}(-, X) \times \mathcal{R}(-, Y) \rightarrow \mathcal{R}(-, X \otimes Y)\}_{X, Y \in \mathcal{R}}$ を付加した構造を持つ。逆に、よい自然変換 $\{\varphi_{X, Y} : \mathcal{R}(-, X) \times \mathcal{R}(-, Y) \rightarrow \mathcal{R}(-, X \otimes Y)\}_{X, Y \in \mathcal{R}}$ があれば複製 $\Delta_X := \varphi_{X, X, X}(id_X, id_X) : X \rightarrow X \otimes X$ が得られるので、関連圏は対称モノイド圏 \mathcal{R} に自然変換 $\{\mathcal{R}(-, X) \times \mathcal{R}(-, Y) \rightarrow \mathcal{R}(-, X \otimes Y)\}_{X, Y \in \mathcal{R}}$ を付加した構造に他ならないと言える。デカルト圏は対称モノイド圏 \mathcal{C} により自然同型 $\{\mathcal{C}(-, X) \times \mathcal{C}(-, Y) \cong \mathcal{C}(-, X \otimes Y)\}_{X, Y \in \mathcal{C}}$ を付加した構造であったから、関連圏は lax-デカルト圏とも呼ぶべきものである。関連圏は [Jac94] で monoidal structure with diagonals として定義されたのが初出と思われる。

本節では、関連圏とその周辺概念の定義、及び基本的な例を記述する。

定義 2.1 : 関連圏

関連圏とは、対称モノイド圏 $\underline{\mathcal{R}} = (\underline{\mathcal{R}}, \otimes, I, \alpha, \lambda, \rho, \gamma)$ と自然変換 $\Delta_X : X \rightarrow X \otimes X$ の組 $\mathcal{R} = (\underline{\mathcal{R}}, \Delta)$ であって、 Δ がモノイド自然変換で結合的かつ可換であるようなものである。ただし、自然変換 Δ がモノイド自然変換で結合的かつ可換であるとは、以下の4つの図式を可換にすることである。

$$\begin{array}{ccc}
 X \otimes Y & \xrightarrow{\Delta_{X \otimes Y}} & X \otimes Y \otimes X \otimes Y \\
 \downarrow = & & \downarrow X \otimes \gamma_{X, Y \otimes Y} \\
 X \otimes Y & \xrightarrow{\Delta_X \otimes \Delta_Y} & X \otimes X \otimes Y \otimes Y
 \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc}
 I & \xrightarrow{\Delta_I} & I \otimes I \\
 \downarrow = & & \downarrow = \\
 I & \xleftarrow{\rho_I (= \lambda_I)} & I \otimes I
 \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc}
 X & \xrightarrow{\Delta_X} & X \otimes X \\
 \downarrow \Delta_X & & \downarrow X \otimes \Delta_X \\
 X \otimes X & \xrightarrow{\Delta_X \otimes X} & X \otimes X \otimes X
 \end{array}$$

$$\begin{array}{ccc}
X & \xrightarrow{\Delta_X} & X \otimes X \\
\Delta_X \downarrow & & \downarrow = \\
X \otimes X & \xrightarrow{\gamma_{X,X}} & X \otimes X
\end{array}$$

この自然変換 Δ を関連圏 \mathcal{R} の複製、複製射あるいは対角射と呼ぶ。

次に関連函手を定義する。関連函手は関連圏の間の強対称モノイド函手で複製を保つものである。

定義 2.2：関連函手

$\mathcal{R}_1, \mathcal{R}_2$ を関連圏とする。関連函手とは、強対称モノイド函手 $F = (F, \mu, \varepsilon) : \mathcal{R}_1 \rightarrow \mathcal{R}_2$ であって、下の図式を可換にするもののこと。

$$\begin{array}{ccc}
F(X) & \xrightarrow{\Delta_{F(X)}} & F(X) \otimes F(X) \\
= \downarrow & & \downarrow \cong \mu_X \\
F(X) & \xrightarrow{F(\Delta_X)} & F(X \otimes X)
\end{array}$$

集合と単射の圏 Set^{mono} は素朴な方法で関連圏とみなせるのであった。この事実は次の2つから従うことだと理解できる。まず、全てのデカルト圏は素朴な方法で関連圏とみなせる。また、デカルト圏のモノ射は直積で閉じていて複製はモノ射なので、モノ射の全体は「関連部分圏」になる。

例 2.3：デカルト圏

全てのデカルト圏は素朴な方法で関連圏とみなせる。特に、 Set は関連圏である。

定義 2.4：関連部分圏

$\mathcal{R} = (\underline{\mathcal{R}}, \Delta)$ を関連圏とする。 \mathcal{R} の関連部分圏とは、 $\underline{\mathcal{R}}$ のモノイド部分圏 $\underline{\mathcal{N}} \subset \underline{\mathcal{R}}$ であって、任意の $\underline{\mathcal{N}}$ の対象 X に対し $\underline{\mathcal{R}}$ の射 Δ_X が $\underline{\mathcal{N}}$ の射であるようなもののことである。

関連部分圏は自然な方法で関連圏とみなせる。

例 2.5：モノ射の成す関連部分圏

デカルト圏 \mathcal{C} に対し、 \mathcal{C} のモノ射全体の成す部分圏 $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ は関連部分圏である。正則モノ射や分裂モノ射についても同様である。特に、 Set^{mono} は関連圏である。

特に \mathcal{C} として有界半束をその順序構造でデカルト圏と見なしたものを考えると、 \mathcal{C} の分裂モノ射は恒等射しかないので、分裂モノ射の全体は離散圏に相关圏の構造を入れたものになる。離散対称モノイド圏とは即ち可換モノイドであるが、このモノイドが関連圏の構造を持つことは冪等であ

ることを意味する。つまり、この操作は有界半束から順序を忘れて冪等可換モノイドをつくる操作と解釈できる。

モノ射の成す関連部分圏の類似例として、可微分多様体の圏の全ての埋め込みの成す部分圏なども関連部分圏である。

§ 3. 構成 Λ の定義

本節では構成 Λ の定義を述べる。 Λ は、与えられた関連圏からデカルト圏を構成する普遍的な操作である。以下、 $\mathcal{R} = (\mathcal{R}, \otimes, I, \alpha, \lambda, \rho, \gamma, \Delta)$ を関連圏とする。これから本節全体を通して、デカルト圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ を定義する。圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ を定義した後に $\Lambda(\mathcal{R})$ が持つ素朴なモノイド構造がデカルト積を与えることを示す。圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ を構成するに当たって、まず双圏様の中間構造 $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ を構成し、その後 $\Lambda(\mathcal{R})$ を作る。

関連圏はしばしばデカルト圏の関連部分圏として構成される。本論文では、与えられた関連圏がどのようなデカルト圏のよい関連部分圏として構成されるのかを調べる。

そのために注目したい関連圏の例はデカルト圏のモノ射達が成す関連部分圏である。例 2.5 に述べたように、デカルト圏 \mathcal{C} に対し、その全てのモノ射の成す部分圏 $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ は関連部分圏である。この $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ をよい関連部分圏として持つデカルト圏は \mathcal{C} である。そこで構成 Λ を、 $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ に Λ を施したとき \mathcal{C} が復元されるように作る。

まず、 \mathcal{C} と $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ の対象は同じであるから、 $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}]$ の対象は $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ の対象と定義すればよい。次に射の定義を考える。デカルト圏における「グラフ」は全てモノ射であったことに注目する。

第一案として、各 $X, Y \in \mathcal{C}^{\text{mono}}$ に対し、 $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}]$ における X から Y への射集合 $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}](X, Y)$ を

$$\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}](X, Y) := \{f : X \rightarrow X \times Y \text{ in } \mathcal{C}^{\text{mono}} \mid (\text{適切な条件式})\}$$

と定義することが考えられる。ただし「適切な条件式」とは f が \mathcal{C} でグラフであることと同値な $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ の条件式である (これは実現可能だが仔細には触れない)。このとき確かに $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}](X, Y) \cong \mathcal{C}(X, Y)$ だが、このままでは合成がうまく定義できない: $f : X \rightarrow X \times Y$ と $g : Y \rightarrow Y \times Z$ の安直な合成は $f \triangleright (X \times g) : X \rightarrow X \times Y \times Z$ で、これから $X \rightarrow X \times Z$ の射を得るためには射影 $X \times Y \times Z \rightarrow X \times Z$ が必要であるが、射影は多くの場合モノ射ではないので使えない。そもそも全ての射影がある関連圏はただのデカルト圏である。

そこで第二案として、各 $X, Y \in \mathcal{C}^{\text{mono}}$ に対し、 $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}]$ における X から Y への射を、「パラメータ付きグラフ」として定義することを考える。すなわち、

$$\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}](X, Y) := \{(A, f) \mid A \in \mathcal{C}^{\text{mono}}, f : X \rightarrow A \times Y \text{ in } \mathcal{C}^{\text{mono}}\} / (\text{適切な同値関係})$$

とする。ただしここで、適切な同値関係とは、 $(A, f) \sim (B, g)$ であるのがちょうど \mathcal{C} で $f \triangleright \pi_Y = g \triangleright \pi_Y$ であるときになるような同値関係である。このような同値関係は実際 $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ の構造のみから得られる。本節では、その構成の詳細を記述する。

本節では、上記第二案の構成の詳細及び well-defined 性の証明を述べる。§3.1 で構成の第一段階として双圏様の中間構造を定義し、§3.2 でその商として $\Lambda[\mathcal{R}]$ を定義し、その well-defined 性を証明する。§3.3 では構成した圏 $\Lambda[\mathcal{R}]$ がデカルト圏になっていることを証明する。

本稿における Λ の構成は、[HT12] の構成が大きなヒントになっているが、重大な違いがある。[HT12] ではまず中間構造として双圏を構成して、その local category の連結成分を取ることで欲しい圏を得ていた。本稿でも概ねそのような方針で構成するのだが、[HT12] で双圏になっていたものに相当する中間構造が双圏にならない。この問題に起因して、連結成分を取ることで圏が得られることが自明ではなくなっている。そのため、最終的に得る圏の well-defined 性の証明 (補題 3.2.4) が書かれている。

§ 3.1. 中間構造 $B(\mathcal{R})$ の構成

本 §3.1 節では、圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ を定義する前準備として、中間構造 $B(\mathcal{R})$ を構成する。

$B(\mathcal{R})$ は、双圏に似た次の 4 つの構造を持っている：

- (1) 対象の集まり $\text{Ob}(B(\mathcal{R}))$
- (2) $B(\mathcal{R})$ の各対象 \bar{X}, \bar{Y} 毎の圏 $B(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ ($B(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ の対象を 1-射と、射を 2-射と呼ぶ。)
- (3) 各 1-射 $v: \bar{X} \rightarrow \bar{Y}, w: \bar{Y} \rightarrow \bar{Z}$ 毎の合成 1-射 $v \triangleright w: \bar{X} \rightarrow \bar{Z}$
- (4) $B(\mathcal{R})$ の各対象 \bar{X} 毎の恒等 1-射 $\text{id}_{\bar{X}}: \bar{X} \rightarrow \bar{X}$

しかしながら、 $B(\mathcal{R})$ は 2-射の間の水平合成を持たないため、双圏にはならない。

$B(\mathcal{R})$ は $\Lambda(\mathcal{R})$ の定義に用いる。 $B(\mathcal{R})$ の対象は $\Lambda(\mathcal{R})$ の対象に対応し、 $B(\mathcal{R})$ の 1-射の同値類が $\Lambda(\mathcal{R})$ の射に対応する。 $B(\mathcal{R})$ の 2-射は、 $B(\mathcal{R})$ の 1-射から $\Lambda(\mathcal{R})$ の射をつくるための同値関係として機能する。

以下、 $B(\mathcal{R})$ を定義する。 $B(\mathcal{R})$ の対象は \mathcal{R} の対象とする。ただし、可読性のために、各 \mathcal{R} の対象 X に対し、それに対応する $B(\mathcal{R})$ における対象を \bar{X} と書くことにする。即ち、 $\text{Ob}(B(\mathcal{R})) := \{\bar{X} | X \in \mathcal{R}\}$ である。はじめに、各対象 $\bar{X}, \bar{Y} \in \text{Ob}(B(\mathcal{R}))$ 毎に圏 $B(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ を定義する。

定義 3.1.1 : $B(\mathcal{R})$ の 1-射

$X, Y \in \mathcal{R}$ とする。 $B(\mathcal{R})$ の \bar{X} から \bar{Y} への 1-射とは、 $A \in \mathcal{R}$ と \mathcal{R} の射 $f: X \rightarrow A \otimes Y$ の組 (A, f) のことである。

このように定めた $B(\mathcal{R})$ の 1-射の同値類が $\Lambda(\mathcal{R})$ の射となる。同値関係として「有限個の 2-射で結ばれていること」を用いる。その 2-射は下記のとおり定義する。

定義 3.1.2 : $B(\mathcal{R})$ の 2-射

$X, Y \in \mathcal{R}$ とし、 $(A, f), (B, g)$ を \bar{X} から \bar{Y} への $B(\mathcal{R})$ の 1-射とする。 $B(\mathcal{R})$ の (A, f) から (B, g) への 2-射とは、 \mathcal{R} の射 $k: A \otimes Y \rightarrow B \otimes Y$ であって下の図式の三角形及び四角形を可換にするもののことである。

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A \otimes Y & \xrightarrow{A \otimes \Delta_Y} & A \otimes Y \otimes Y \\
 & \nearrow f & \downarrow k & & \downarrow k \otimes Y \\
 X & & & & \\
 & \searrow g & B \otimes Y & \xrightarrow{B \otimes \Delta_Y} & B \otimes Y \otimes Y
 \end{array}$$

2-射の例を2つ挙げておく。

命題 3.1.3：自明な 2-射

$B, X, Y \in \mathcal{R}$ とし、 (A, f) を \overline{X} から \overline{Y} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射、 $a : A \rightarrow B$ を \mathcal{R} の射とする。このとき、

- (1) $g := f \triangleright (a \otimes Y)$ とおくと、 (B, g) は \overline{X} から \overline{Y} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射である。
- (2) \mathcal{R} の射 $k := (a \otimes Y)$ は $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 2-射 $k : (A, f) \rightarrow (B, g)$ を与える。

Proof. (1) 定義より従う。

(2) \otimes の函手性から従う。下図の右の四角形の左上から右下への射は、上下どちらも $a \otimes \Delta_Y$ である。

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A \otimes Y & \xrightarrow{A \otimes \Delta_Y} & A \otimes Y \otimes Y \\
 & \nearrow f & \downarrow k := a \otimes Y & & \downarrow k \otimes Y = a \otimes Y Y \\
 X & & & & \\
 & \searrow g := f \triangleright k & B \otimes Y & \xrightarrow{B \otimes \Delta_Y} & B \otimes Y \otimes Y
 \end{array}$$

□

命題 3.1.4：複製は 2-射である

$X, Y \in \mathcal{R}$ とし、 (A, f) を \overline{X} から \overline{Y} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射とする。このとき、

- (1) $g := f \triangleright (A \otimes \Delta_Y)$ とおくと、 $(A \otimes Y, g)$ は \overline{X} から \overline{Y} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射である。
- (2) \mathcal{R} の射 $k := A \otimes \Delta_Y$ は $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 2-射 $k : (A, f) \rightarrow (A \otimes Y, g)$ を与える。

Proof. (1) 定義より従う。

(2) Δ が結合的であったことから従う。右側の四角形が可換であることは $\Delta_Y \triangleright (Y \otimes \Delta_Y) = \Delta_Y \triangleright (\Delta_Y \otimes Y)$ であることによる。

$$\begin{array}{ccccc}
& & A \otimes Y & \xrightarrow{A \otimes \Delta_Y} & A \otimes Y \otimes Y \\
& \nearrow f & \downarrow k := A \otimes \Delta_Y & & \downarrow k \otimes Y = A \otimes \Delta_Y \otimes Y \\
X & & & & \\
& \searrow g := f \triangleright k & A \otimes Y \otimes Y & \xrightarrow{AY \otimes \Delta_Y} & A \otimes Y \otimes Y \otimes Y
\end{array}$$

□

定義 3.1.5 : local category of $\mathcal{B}(\mathcal{R})$

各 $X, Y \in \mathcal{R}$ に対し、圏 $\mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$ を以下のように定める：対象は \overline{X} から \overline{Y} への 1-射、射はその間の 2-射とし、2-射同士の (垂直) 合成、及び恒等 2-射は素直に定義する。これらは well-defined で、圏の公理を満たす。

以上で圏 $\mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$ が定義された。本小節の残りで 1-射の合成、恒等 1-射と 2-射の左 whiskering を定義し、中間構造 $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の定義を終える。

定義 3.1.6 : 1-射の合成

$X, Y, Z \in \mathcal{R}$ とし、 (A, f) を \overline{X} から \overline{Y} への、 (B, g) を \overline{Y} から \overline{Z} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射とする。 \overline{X} から \overline{Z} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射 $(A, f) \triangleright (B, g)$ を $(A \otimes B, h)$ と定める。ただし \mathcal{R} の射 $h : X \rightarrow A \otimes B \otimes Z$ は次の列の合成で定める：

$$X \xrightarrow{f} A \otimes Y \xrightarrow{A \otimes g} A \otimes B \otimes Z.$$

この合成は結合律を満たす。

定義 3.1.7 : 恒等 1-射

この恒等射と上記合成は整合性の同型の違いを除いて単位律を満たす。

命題 3.1.8 : 2-射の左 whiskering

$X, Y, Z \in \mathcal{R}$ とし、 (A, f) を \overline{X} から \overline{Y} への、 $(B_1, g_1), (B_2, g_2)$ を \overline{Y} から \overline{Z} への $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射とする。 $k : (B_1, g_1) \rightarrow (B_2, g_2)$ を $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 2-射とする。このとき、 \mathcal{R} の射 $f * k : A \otimes B_1 \otimes Z \rightarrow A \otimes B_2 \otimes Z$ を $f * k := A \otimes k$ で定めると、これは $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 2-射 $f * k : (A, f) \triangleright (B_1, g_1) \rightarrow (A, f) \triangleright (B_2, g_2)$ を与える。

Proof. 次の図式の上下が等しいことを示せばよい：

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A \otimes B_1 \otimes Z & \xrightarrow{AB_1 \otimes \Delta_Z} & A \otimes B_1 \otimes Z \otimes Z \\
 & \nearrow^{A \otimes g_1} & \downarrow f * k & & \downarrow (f * k) \otimes Z := A \otimes k \otimes Z \\
 X & \xrightarrow{f} & A \otimes Y & & \\
 & \searrow_{A \otimes g_2} & A \otimes B_2 \otimes Z & \xrightarrow{AB_2 \otimes \Delta_Z} & A \otimes B_2 \otimes Z \otimes Z
 \end{array}$$

k は 2-射であったから、次の図式は可換である：

$$\begin{array}{ccccc}
 & & B_1 \otimes Z & \xrightarrow{B_1 \otimes \Delta_Z} & B_1 \otimes Z \otimes Z \\
 & \nearrow^{g_1} & \downarrow k & & \downarrow k \otimes Z \\
 Y & & B_2 \otimes Z & \xrightarrow{B_2 \otimes \Delta_Z} & B_2 \otimes Z \otimes Z \\
 & \searrow_{g_2} & & &
 \end{array}$$

この図式に $A \otimes -$ を施せば、求める図式の可換性を得る。

□

以上で中間構造 $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の定義が完了した。次節で圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ を定義し、次々節でそのデカルト構造を示す。

§ 3.2. 圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ の構成

本節では圏 $\Lambda(\mathcal{R})$ の定義を完成する。まず前述の通り $\Lambda(\mathcal{R})$ の射を $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射の同値類として定義する。次に合成を $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ の 1-射の合成から誘導されるものとして定義するが、この well-defined 性は非自明であるから、これを示す。

定義 3.2.1： $\Lambda(\mathcal{R})$ の対象

$\text{Ob}(\Lambda(\mathcal{R})) := \text{Ob}(\mathcal{B}(\mathcal{R})) (= \{\bar{X} \mid X \in \text{Ob}(\mathcal{R})\})$ とする。

定義 3.2.2： $\Lambda(\mathcal{R})$ の射

$\mathcal{B}(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ 上の同値関係 \sim を二項関係「2-射で繋がれている」が生成する同値関係とする。すなわち、2つの 2-射 $(A, f), (B, g) : \bar{X} \rightarrow \bar{Y}$ が $(A, f) \sim (B, g)$ であるのは、有限個の 2-射 $k_{2i} : (C_{2i}, h_{2i}) \rightarrow (C_{2i+1}, h_{2i+1})$, $k_{2i+1} : (C_{2i+2}, h_{2i+2}) \rightarrow (C_{2i+1}, h_{2i+1})$ ($i = 0, \dots, n-1$) が存在して、 $(C_0, h_0) = (A, f)$, $(C_{2n}, h_{2n}) = (B, g)$ であるときである。この \sim を用いて $\Lambda(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y}) := \mathcal{B}(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y}) / \sim$ と定義する。即ち、 $\Lambda(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ は $\mathcal{B}(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y})$ の連結成分全体の集合である。

これからこの商集合の上に合成が誘導されることを示す (補題 3.2.4)。そのために、先に必要な技術的な補題 (補題 3.2.3) を示しておく。

補題 3.2.3 に先んじて、その意味を説明しておく。前述のとおり、 $\Lambda[\text{Set}^{\text{mono}}]$ の射は Set^{mono} の射をグラフとするようなものである。一方で、 Set^{mono} の射はそれ自体素朴に $\Lambda[\text{Set}^{\text{mono}}]$ の射だとみなせるべきである。即ち、単射写像 $f: X \rightarrow Y$ に対して、 f 自身を $\Lambda[\text{Set}^{\text{mono}}]$ に埋め込んだ射 $[1, f]$ と f のグラフ $[X, (id_X, f)]$ は、 $(\Lambda[\text{Set}^{\text{mono}}])$ の射として) 同一であるべきだ。補題 3.2.3 はまさしくこれを主張するものである。

補題 3.2.3 : \mathcal{R} の射のグラフは $\Lambda(\mathcal{R})$ ではもとの \mathcal{R} の射と同じ

$(A, f): \bar{X} \rightarrow \bar{Y}$ in $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ に対し、 $(A, f) \sim (X \otimes A, \Delta_X \triangleright (X \otimes f))$ である。

$$(X \xrightarrow{f} A \otimes Y)$$

$$\sim (X \xrightarrow{\Delta_X} X \otimes X \xrightarrow{X \otimes f} X \otimes A \otimes Y)$$

Proof. 次のように同値で結ぶことができる。

$$\begin{aligned} & (A, f) \\ & \sim (A \otimes Y, f \triangleright (A \otimes \Delta_Y)) \quad (\text{命題 3.1.4 より}) \\ & \sim (A \otimes A \otimes Y, f \triangleright (A \otimes \Delta_Y) \triangleright (\Delta_A \otimes YY)) \quad (\text{命題 3.1.3 と 命題 3.1.8 より}) \\ & = (A \otimes A \otimes Y, f \triangleright (\Delta_A \otimes \Delta_Y)) \quad (\otimes \text{ の関手性より}) \\ & \sim (A \otimes Y \otimes A, f \triangleright (\Delta_A \otimes \Delta_Y) \triangleright (A \otimes \gamma_{AY} \otimes Y)) \quad (\text{命題 3.1.3 と 命題 3.1.8 より}) \\ & = (A \otimes Y \otimes A, f \triangleright \Delta_{A \otimes Y}) \quad (\because \Delta \text{ はモノイド自然変換であった}) \\ & = (A \otimes Y \otimes A, \Delta_X \triangleright (f \otimes f)) \quad (\Delta \text{ の自然性より}) \\ & \sim (X \otimes A, \Delta_X \triangleright (X \otimes f)) \quad (\text{命題 3.1.3 と 命題 3.1.8 より}) \end{aligned}$$

これで示された。分かりやすさのために、同じ式変形の図式と string diagram を付しておく。

$$(X \xrightarrow{f} A \otimes Y)$$

$$\sim (X \xrightarrow{f} A \otimes Y \xrightarrow{A \otimes \Delta_Y} A \otimes Y \otimes Y) \quad (\text{by prop 3.2.4})$$

(by prop 3.2.3 and 3.2.7)

$$\sim (X \xrightarrow{f} A \otimes Y \xrightarrow{A \otimes \Delta_Y} A \otimes Y \otimes Y \xrightarrow{\Delta_A \otimes YY} A \otimes A \otimes Y \otimes Y)$$

$$= (X \xrightarrow{f} A \otimes Y \xrightarrow{\Delta_A \otimes \Delta_Y} A \otimes A \otimes Y \otimes Y) \quad (\text{by functoriality of } \otimes)$$

$$\sim (X \xrightarrow{f} A \otimes Y \xrightarrow{\Delta_{AY}} A \otimes Y \otimes A \otimes Y) \quad (\text{because } \Delta \text{ is monoidal})$$

$$= (X \xrightarrow{\Delta_X} X \otimes X \xrightarrow{f \otimes f} A \otimes Y \otimes A \otimes Y) \quad (\text{by naturality of } \Delta)$$

$$= (X \xrightarrow{\Delta_X} X \otimes X \xrightarrow{X \otimes f} X \otimes A \otimes Y \xrightarrow{f \otimes AY} A \otimes Y \otimes A \otimes Y)$$

$$\sim (X \xrightarrow{\Delta_X} X \otimes X \xrightarrow{X \otimes f} X \otimes A \otimes Y) \quad (\text{by prop 3.2.3 and 3.2.7})$$

以上で示された。参考までに、この証明を String Diagram を用いて書き直しておく。次のようになる：

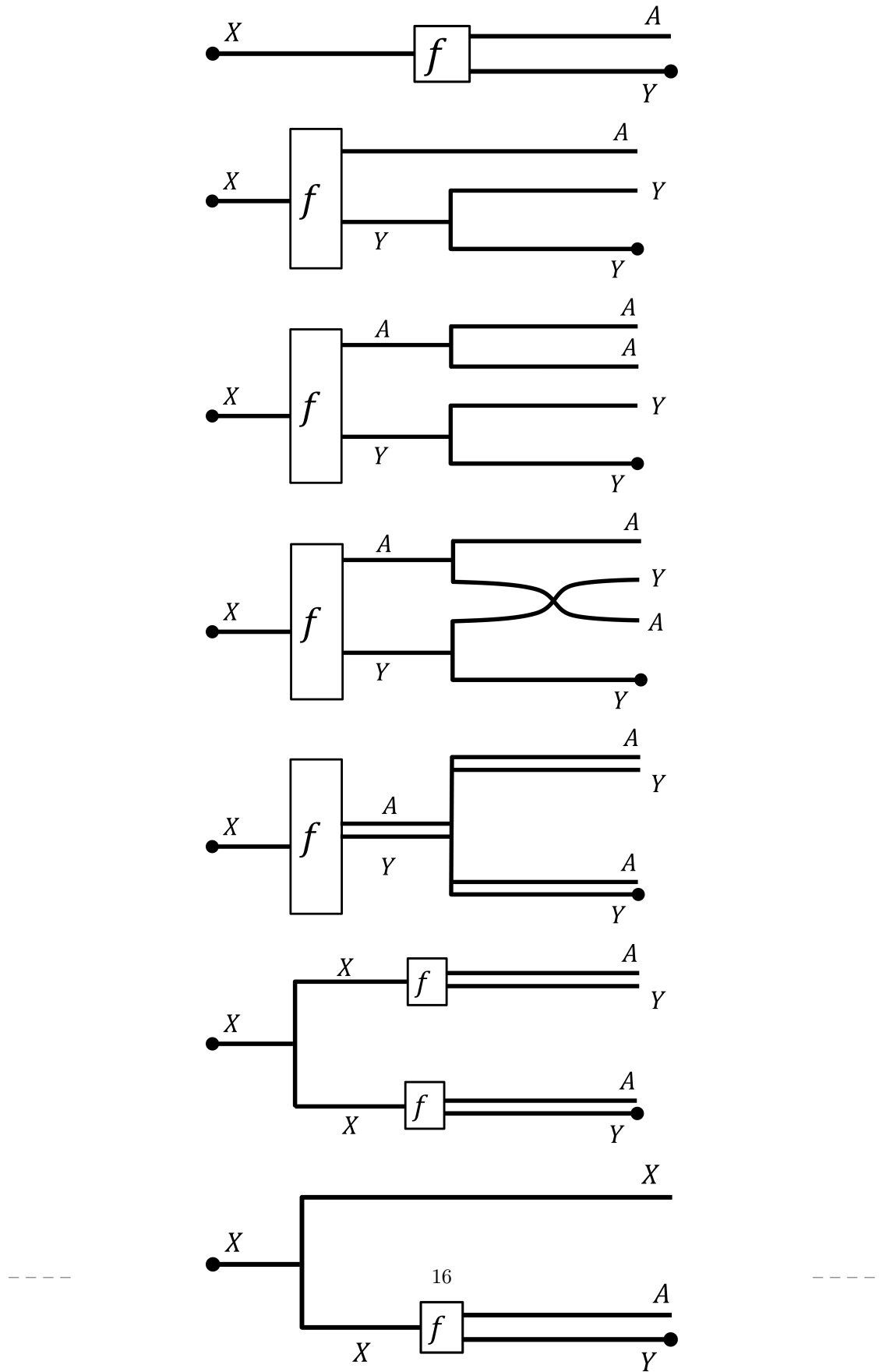


Figure 1: String Diagram による証明

□

補題 3.2.4 : $\Lambda(\mathcal{R})$ の射の合成の well-defined 性

$\overline{X}, \overline{Y}, \overline{Z} \in \mathcal{B}(\mathcal{R})$ とする。任意の $(A_1, f_1), (A_2, f_2) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$, $(B_1, g_1), (B_2, g_2) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{Y}, \overline{Z})$ に対し、 $(A_1, f_1) \sim (A_2, f_2)$ かつ $(B_1, g_1) \sim (B_2, g_2)$ ならば、 $(A_1, f_1) \triangleright (B_1, g_1) \sim (A_2, f_2) \triangleright (B_2, g_2)$ である。

Proof. 同値関係 \sim は 2-射の生成する同値関係として定義されていたので、次の 2 つを示せばよい：

- (1) 任意の $(A_1, f_1), (A_2, f_2) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$, $(B, g) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{Y}, \overline{Z})$ 及び $k : (A_1, f_1) \rightarrow (A_2, f_2)$ に対し、 $(A_1, f_1) \triangleright (B, g) \sim (A_2, f_2) \triangleright (B, g)$ である
- (2) 任意の $(A, f) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$, $(B_1, g_1), (B_2, g_2) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{Y}, \overline{Z})$ 及び $l : (B_1, g_1) \rightarrow (B_2, g_2)$ に対し、 $(A, f) \triangleright (B_1, g_1) \sim (A, f) \triangleright (B_2, g_2)$ である。

このうち (2) は命題 3.1.8 そのものである。従って、(1) を示せば十分である。

(1) を示す。 $(A_1, f_1), (A_2, f_2) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{X}, \overline{Y})$, $(B, g) \in \mathcal{B}(\mathcal{R})(\overline{Y}, \overline{Z})$ 及び $k : (A_1, f_1) \rightarrow (A_2, f_2)$ を任意に固定する。 $(A_1, f_1) \triangleright (B, g) \sim (A_2, f_2) \triangleright (B, g)$ を示す。

$$\begin{aligned}
& (A_1, f_1) \triangleright (B, g) \\
&= (A_1 \otimes B, f_1 \triangleright (A_1 \otimes g)) \quad (\text{合成の定義より}) \\
&\sim (A_1 \otimes Y \otimes B, f_1 \triangleright (A_1 \otimes \Delta_Y) \triangleright (A_1 Y \otimes g)) \quad (\text{補題 3.2.3 と 命題 3.1.8 より}) \\
&\sim (A_2 \otimes Y \otimes B, f_1 \triangleright (A_1 \otimes \Delta_Y) \triangleright (A_1 Y \otimes g) \triangleright (k \otimes BZ)) \quad (\text{命題 3.1.3 と 命題 3.1.8 より}) \\
&= (A_2 \otimes Y \otimes B, f_1 \triangleright (A_1 \otimes \Delta_Y) \triangleright (k \otimes Y) \triangleright (A_2 Y \otimes g)) \quad (\otimes \text{ の函手性より}) \\
&= (A_2 \otimes Y \otimes B, f_2 \triangleright (A_2 \otimes \Delta_Y) \triangleright (A_2 Y \otimes g)) \quad (\because k \text{ は } (A_1, f_1) \text{ から } (A_2, f_2) \text{ への 2-射であった}) \\
&\sim (A_2 \otimes B, f_2 \triangleright (A_2 Y \otimes g)) \quad (\text{命題 3.2.3 と 命題 3.1.8 より})
\end{aligned}$$

以上で示された。

$$(X \xrightarrow{f_1} A_1 \otimes Y \xrightarrow{A_1 \otimes g} A_1 \otimes B \otimes Z)$$

(by prop 3.2.7, lem 3.3.3)

$$\begin{aligned}
&\sim (X \xrightarrow{f_1} A_1 \otimes Y \xrightarrow{A_1 \otimes \Delta_Y} A_1 \otimes Y \otimes Y \xrightarrow{A_1 Y \otimes g} A_1 \otimes Y \otimes B \otimes Z) \\
&\sim (X \xrightarrow{f_1} A_1 \otimes Y \xrightarrow{A_1 \otimes \Delta_Y} A_1 \otimes Y \otimes Y \xrightarrow{A_1 Y \otimes g} A_1 \otimes Y \otimes B \otimes Z)
\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
& \xrightarrow{k \otimes BZ} A_2 \otimes Y \otimes B \otimes Z && (\text{by prop 3.2.3, prop 3.2.7}) \\
= & (X \xrightarrow{f_1} A_1 \otimes Y \xrightarrow{A_1 \otimes \Delta_Y} A_1 \otimes Y \otimes Y \xrightarrow{k \otimes Y} A_2 \otimes Y \otimes Y \\
& \xrightarrow{A_2 Y \otimes g} A_2 \otimes Y \otimes B \otimes Z) && (\text{by functoriality of } \otimes) \\
= & (X \xrightarrow{f_2} A_2 \otimes Y \xrightarrow{A_2 \otimes \Delta_Y} A_2 \otimes Y \otimes Y \\
& \xrightarrow{A_2 Y \otimes g} A_2 \otimes Y \otimes B \otimes Z) && (\text{because } k \text{ is a 2-morphism from } (A_1, f_1) \text{ to } (A_2, f_2)) \\
\sim & (X \xrightarrow{f_2} A_2 \otimes Y \xrightarrow{A_2 \otimes g_2} A_2 \otimes B \otimes Z) && (\text{by prop 3.2.7 and 3.3.3})
\end{aligned}$$

以上で示された。

□

定義 3.2.5： $\Lambda(\mathcal{R})$ の射の合成

$\bar{X}, \bar{Y}, \bar{Z} \in \Lambda(\mathcal{R}), [A, f] \in \Lambda(\mathcal{R})(\bar{X}, \bar{Y}), [B, g] \in \Lambda(\mathcal{R})(\bar{Y}, \bar{Z})$ とする。これらの合成を $[A, f] \triangleright [B, g] := [(A, f) \triangleright (B, g)]$ で定める。これは補題 3.2.4 より well-defined である。

定義 3.2.6： $\Lambda(\mathcal{R})$ の恒等射

各 $\bar{X} \in \Lambda(\mathcal{R})$ に対し、 $id_{\bar{X}} := [I, \rho_X^{-1}]$ と定める。

命題 3.2.7： $\Lambda(\mathcal{R})$ の結合則

上記合成は結合則を満たす。これは $B(\mathcal{R})$ で 1-射の結合則が成り立っていたことから従う。

命題 3.2.8： $\Lambda(\mathcal{R})$ の単位律

上記合成と恒等射は単位律を満たす。これは $B(\mathcal{R})$ で 1-射の単位律が成り立っていたことから従う。

定義 3.2.9：圏 $\Lambda(\mathcal{R})$

定義 3.2.1, 定義 3.2.2, 定義 3.2.5, 定義 3.2.6 で与えられる構造達は、命題 3.2.7, 命題 3.2.8 より、圏を成す。この圏を $\Lambda(\mathcal{R})$ と書くことにする。

§ 3.3. $\Lambda(\mathcal{R})$ のデカルト圏構造

以上で定義した $\Lambda(\mathcal{R})$ がデカルト圏になっていることを示す。 \mathcal{R} から引き継ぐモノイド構造がそのまま直積となる。まずモノイド構造を引き継ぐことを示し、その後それが直積の普遍性を持つことを示す。

定義 3.3.1 : $\Lambda(\mathcal{R})$ のモノイド構造

\mathcal{R} を 関連圏とする。 $\Lambda(\mathcal{R})$ は、 \mathcal{R} と同様にして対称モノイド圏となる。モノイド積の関手 \otimes' と単位対象 I' のみ明示する。まず \otimes' を次のように定める。

$$\begin{array}{ccc} \otimes' & : & \Lambda(\mathcal{R}) \times \Lambda(\mathcal{R}) \longrightarrow \Lambda(\mathcal{R}) \\ & \Downarrow & \Downarrow \\ & (\bar{X}, \bar{Y}) \longmapsto & \bar{X} \otimes \bar{Y} \\ & \downarrow ([A, f], [B, g]) \mapsto [A \otimes B, f \sqcup g] \downarrow & \\ & (\bar{X}', \bar{Y}') \longmapsto & \bar{X}' \otimes \bar{Y}' \end{array}$$

ただし、 $f \sqcup g := (f \otimes g) \triangleright (A \otimes \gamma_{X, B} \otimes Y)$ である。このように定めた \otimes' は確かに well-defined である。単位対象は $I' := I$ で定める。

命題 3.3.2 : $\Lambda[\mathcal{R}]$ の直積

簡単のため $\mathcal{C} := \Lambda[\mathcal{R}]$ とおく。 $\bar{X}, \bar{Y} \in \mathcal{C}$ に対し、 $(\overline{X \otimes Y}, \pi_{\bar{X}}, \pi_{\bar{Y}})$ は \bar{X} と \bar{Y} の直積である。ただし、 \bar{Y} への射影 $\pi_{\bar{Y}} : \overline{X \otimes Y} \rightarrow \bar{Y}$ は、 $\pi_{\bar{Y}} := [X, id_{X \otimes Y}]$ で定める。 \bar{X} への射影 $\pi_{\bar{X}} : \overline{X \otimes Y} \rightarrow \bar{X}$ は、 $\pi_{\bar{X}} := [Y, \gamma_{X, Y}]$ で定める。

Proof. $\bar{Z} \in \mathcal{C}$ を任意に取る。対応 $\varphi : \mathcal{C}(\bar{Z}, \overline{X \otimes Y}) \rightarrow \mathcal{C}(\bar{Z}, \bar{X}) \times \mathcal{C}(\bar{Z}, \bar{Y})$ を $\varphi([C, h]) := ([C, h] \triangleright \pi_{\bar{X}}, [C, h] \triangleright \pi_{\bar{Y}})$ で定める。 φ が全単射であることを示す。

次の3つのことをすればよい。

- (i) φ の逆対応 ψ を構成する。
- (ii) $\psi \triangleright \varphi = id$ であることを示す。
- (iii) $\varphi \triangleright \psi = id$ であることを示す。

- (i) φ の逆対応 ψ を構成する。

$[A, f] : \bar{Z} \rightarrow \bar{X}$, $[B, g] : \bar{Z} \rightarrow \bar{Y}$ を任意に取る。 \mathcal{R} の射 $f \sqcup g : Z \rightarrow A \otimes B \otimes X \otimes Y$ を $f \sqcup g := \Delta_Z \triangleright (f \otimes g)$ で定める。即ち $f \sqcup g$ は次の列の合成である：

$$Z \rightarrow Z \otimes Z \rightarrow (A \otimes X) \otimes (B \otimes Y) \rightarrow (A \otimes B) \otimes (X \otimes Y)$$

$\psi([A, f], [B, g]) := [A \otimes B, f \sqcup g]$ とする。 ψ の well-defined 性を示す。次の2つを示せばよい：

- (a) 任意の $(A_1, f_1), (A_2, f_2) : \bar{Z} \rightarrow \bar{X}, (B, g) : \bar{Z} \rightarrow \bar{Y}$ in $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ と $k : (A_1, f_1) \rightarrow (A_2, f_2)$ に対し、

$(A_1 \otimes B, f_1 \sqcup g) \sim (A_2 \otimes B, f_2 \sqcup g)$ である。

(b) 任意の $(A, f) : \bar{Z} \rightarrow \bar{X}, (B_1, g_1), (B_2, g_2) : \bar{Z} \rightarrow \bar{Y}$ in $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ と $l : (B_1, g_1) \rightarrow (B_2, g_2)$ に対し、 $(A \otimes B_1, f \sqcup g_1) \sim (A \otimes B_2, f \sqcup g_2)$ である。

両者の証明は同様なので (a) のみ示す。 $k \otimes BXY : (A_1 \otimes B, f_1 \sqcup g) \rightarrow (A_2 \otimes B, f_2 \sqcup g)$ は次の図式を可換にするから、確かに $(A_1 \otimes B, f_1 \sqcup g)$ から $(A_2 \otimes B, f_2 \sqcup g)$ への 2-射である。

$$\begin{array}{ccccc}
 & & A_1 \otimes B \otimes X \otimes Y & \xrightarrow{\Delta} & A_1 \otimes B \otimes X \otimes Y \otimes X \otimes Y \\
 & \nearrow f_1 \sqcup g & \downarrow k \otimes BXY & & \downarrow k \otimes BXYXY \\
 Z & & & & \\
 & \searrow f_2 \sqcup g & A_2 \otimes B \otimes X \otimes Y & \xrightarrow{\Delta} & A_1 \otimes B \otimes X \otimes Y \otimes X \otimes Y
 \end{array}$$

(ii) $\psi \triangleright \varphi = id$ であることを示す。 $[A, f] : \bar{Z} \rightarrow \bar{X}$, $[B, g] : \bar{Z} \rightarrow \bar{Y}$ を任意に取る。 $([A \otimes B, f \sqcup g] \triangleright \pi_{\bar{X}}, [A \otimes B, f \sqcup g] \triangleright \pi_{\bar{Y}}) = ([A, f], [B, g])$ であることを示す。2つの証明は同様なので、 $([A \otimes B, f \sqcup g] \triangleright \pi_{\bar{Y}}) = [B, g]$ であることをのみ示す。

$$\begin{aligned}
 [A \otimes B, f \sqcup g] \triangleright \pi_{\bar{Y}} &= [A \otimes B \otimes X, f \sqcup g] \quad (\triangleright \text{の定義より}) \\
 &= [A \otimes B \otimes X, \Delta_Z \triangleright (f \otimes g) \triangleright (A \otimes \gamma_{X,B} \otimes Y)] \quad (\sqcup \text{の定義より}) \\
 &= [A \otimes X \otimes B, \Delta_Z \triangleright (f \otimes g)] \quad (\text{命題 3.1.3 より}) \\
 &= [Z \otimes B, \Delta_Z \triangleright (Z \otimes g)] \quad (\text{命題 3.1.3 より}) \\
 &= [B, g] \quad (\text{補題 3.2.3 より})
 \end{aligned}$$

$([A \otimes B, f \sqcup g] \triangleright \pi_{\bar{X}}) = [A, f]$ であることの証明も同様である。以上で $\psi \triangleright \varphi = id$ であることが示された。

(iii) $\varphi \triangleright \psi = id$ であることを示す。 $[C, h] : \bar{Z} \rightarrow \overline{X \otimes Y}$ を任意に取る。 $[C, h] = \psi(\varphi([C, h]))$ であることを示す。

(次頁に続く)

(続き : $[C, h] = \psi(\varphi([C, h]))$ であることの証明)

$$\begin{aligned}
& \psi(\varphi([C, h])) \\
&= \psi([C, h] \triangleright \pi_X, [C, h] \triangleright \pi_Y) \quad (\varphi \text{ の定義より}) \\
&= \psi([C \otimes Y, h \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y})], [C \otimes X, h]) \quad (\triangleright \text{ の定義より}) \\
&= [C \otimes Y \otimes C \otimes X, (h \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y})) \sqcap h] \quad (\varphi \text{ の定義より}) \\
&= [C \otimes Y \otimes C \otimes X, \Delta_Z \triangleright ((h \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y})) \otimes h) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y)] \quad (\sqcap \text{ の定義より}) \\
&= [C \otimes Y \otimes C \otimes X, \Delta_Z \triangleright (h \otimes h) \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y} \otimes CXY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y)] \quad (\otimes \text{ の関手性より}) \\
&= [C \otimes Y \otimes C \otimes X, h \triangleright \Delta_{CXY} \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y} \otimes CXY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y)] \quad (\Delta \text{ の自然性より}) \\
&= [C \otimes Y \otimes C \otimes X, h \triangleright (\Delta_C \otimes \Delta_{XY}) \triangleright (C \otimes \gamma_{CX,Y} \otimes XY)] \quad (*) \\
&= [C \otimes C \otimes X \otimes Y, h \triangleright (\Delta_C \otimes \Delta_{XY})] \quad (\text{命題 3.1.3}) \\
&= [C \otimes X \otimes Y, h \triangleright (C \otimes \Delta_{XY})] \quad (\text{命題 3.1.3}) \\
&= [C, h] \quad (\text{命題 3.1.4 and 命題 3.1.8})
\end{aligned}$$

上式中の $(*)$ の部分は下のように示される。

$$\begin{aligned}
& \Delta_{CXY} \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y} \otimes CXY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_{XY}) \triangleright (C \otimes \gamma_{C,XY} \otimes XY) \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y} \otimes CXY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y) \quad (\text{by monoidality of } \Delta) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (CCX \otimes \gamma_{X,Y} \otimes Y) \triangleright (C \otimes \gamma_{C,XY} \otimes XY) \triangleright (C \otimes \gamma_{X,Y} \otimes CXY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (CCX \otimes \gamma_{X,Y} \otimes Y) \triangleright (CC \otimes \gamma_{X,Y} \otimes XY) \triangleright (C \otimes \gamma_{C,YX} \otimes XY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,CX} \otimes Y) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (CCX \otimes \gamma_{X,Y} \otimes Y) \triangleright (CC \otimes \gamma_{X,Y} \otimes XY) \triangleright (C \otimes \gamma_{C,Y} \otimes XY) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,X} \otimes Y) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (C \otimes \gamma_{CXX,Y} \otimes Y) \triangleright (CY \otimes \gamma_{X,X} \otimes CY) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (CC \otimes \gamma_{X,X} \otimes YY) \triangleright (C \otimes \gamma_{CXX,Y} \otimes Y) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (C \otimes \gamma_{CXX,Y} \otimes Y) \quad (\text{by commutativity of } \Delta_X) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_X \otimes \Delta_Y) \triangleright (CCX \otimes \gamma_{X,Y} \otimes Y) \triangleright (C \otimes \gamma_{CX,Y} \otimes XY) \quad (\text{by coherence}) \\
&= (\Delta_C \otimes \Delta_{XY}) \triangleright (C \otimes \gamma_{CX,Y} \otimes XY) \quad (\text{by monoidality of } \Delta)
\end{aligned}$$

上式中の (by coherence) と書かれた部分は六角形公理及び関手性・自然性のみから導かれる主張である。

以上で示された。 □

命題 3.3.3 : $\Lambda(\mathcal{R})$ の終対象

$\Lambda(\mathcal{R})$ の単位対象 I は終対象である。

Proof. 任意に $\bar{X} \in \Lambda(\mathcal{R})$ を取り、 $!_{\bar{X}} := [X, \lambda_X] : \bar{X} \rightarrow I$ と置く。任意の $[A, f] : \bar{X} \rightarrow I$ に対し、

次のように $[A, f] = !_{\overline{X}}$ であることを示す。 $(A, f) \in (X, \lambda_X)$ であることを示せばよい。

$f' : X \rightarrow A$ を $f' := (- \otimes I)^{-1}(f \triangleright \lambda_X)$ と定めると、

$$\begin{aligned} & (A, f) \\ &= (A, \lambda_X \triangleright (f' \times I)) \\ &\sim (X, \lambda_X) \text{ (命題 3.1.3 より)} \end{aligned}$$

である。以上で示された。 □

以上より $\Lambda(\mathcal{R})$ は全ての有限直積を持ち、従ってデカルト圏であることが示された。次節では Λ が関連圏からデカルト圏を得る普遍的な方法であることを示す。

§ 4. 構成 Λ の普遍性

前節で定義した構成 Λ は、関連圏からデカルト圏を得る普遍的な方法になっている。今節ではこの普遍性を示す。まず、 \mathcal{R} から $\Lambda(\mathcal{R})$ への普遍的な関手を定める。

定義 4.1：ユニット関手 $H_{\mathcal{R}}$

関手 $H_{\mathcal{R}} : \mathcal{R} \rightarrow \Lambda[\mathcal{R}]$ を次で定める。

$$\begin{array}{ccc} H_{\mathcal{R}} & : & \mathcal{R} \longrightarrow \Lambda(\mathcal{R}) \\ \Downarrow & & \Downarrow \\ X & \longmapsto & \overline{X} \\ \downarrow f & \longmapsto & [I, f \triangleright \rho_Y] \downarrow \\ Y & \longmapsto & \overline{Y} \end{array}$$

$H_{\mathcal{R}}$ は関連関手になる。 $H_{\mathcal{R}}$ の関連関手としての構造の同型 $m_{X,Y} : H_{\mathcal{R}}(X) \otimes H_{\mathcal{R}}(Y) \rightarrow H_{\mathcal{R}}(X \otimes Y)$ と $e : I \rightarrow H_{\mathcal{R}}(I)$ を次で定める。

$$\begin{aligned} m_{X,Y} &:= [I, \rho_{X \otimes Y}^{-1}] \\ e &:= [I, \rho_I^{-1}] \end{aligned}$$

そして Λ は次の普遍性を満たす（煩雑な議論を避けるため、2-圏論的主張を 1-圏論的主張に弱めている）。

命題 4.2： Λ の普遍性

\mathcal{R} を関連圏とし、デカルト圏 $\mathcal{C} := \Lambda[\mathcal{R}]$ 及び関連関手 $H_{\mathcal{R}} : \mathcal{R} \rightarrow \mathcal{C}$ を上で定めたものとする。このとき、任意のデカルト圏 \mathcal{D} 及び関連関手 $F = (F, \mu, \varepsilon) : \mathcal{R} \rightarrow \mathcal{D}$ に対し、次を満たす（強）モノイド関手 $\overline{F} : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ が一意に存在する：

$$F = H_{\mathcal{R}} \triangleright \overline{F}$$

Proof. \mathcal{D} をデカルト圏とする。3ステップに分けて示す。

- (i) \overline{F} の構成と well-defined 性の証明
- (ii) $\overline{\quad}$ が $H_{\mathcal{R}} \triangleright \overline{\quad}$ の左逆であることの証明
- (iii) $\overline{\quad}$ が $H_{\mathcal{R}} \triangleright \overline{\quad}$ の右逆であることの証明

(i) (\overline{F} の構成と well-defined 性の証明)

関連関手 $F = (F, \mu, \varepsilon) : \mathcal{R} \rightarrow \mathcal{D}$ に対し（強）モノイド関手 $\overline{F} = (\overline{F}, \overline{\mu}, \overline{\varepsilon}) : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ を対応させる操作 $\overline{(\quad)}$ を次で定める：

- 各 $\overline{X} \in \mathcal{C}$ に対し、 $\overline{F}(\overline{X}) := F(X)$ とする

- 各 $[A, f] : \bar{X} \rightarrow \bar{Y}$ in \mathcal{C} に対し、 $\bar{F}([A, f])$ を $\bar{F}([A, f]) := F(f) \triangleright \mu_{A,Y}^{-1} \triangleright \pi_{2,F(A),F(Y)}$ とする。

ただし、 $\mu_{A,Y} : F(A) \times F(Y) \rightarrow F(A \otimes Y)$ は F のモノイド関手としての構造の同型であり、 $\pi_{2,F(A),F(Y)}$ はデカルト圏 \mathcal{D} における第二射影である。分かりやすさのために追記する。 $F(f)$ は下の列の合成である：

$$F(X) \rightarrow F(A \otimes Y) \cong F(A) \times F(Y) \rightarrow F(Y).$$

\bar{F} の well-defined 性を示す。 $(A, f), (B, g) : \bar{X} \rightarrow \bar{Y}$ in $\mathcal{B}(\mathcal{R})$ と $k : (A, f) \rightarrow (B, g)$ を任意に取る。 $\bar{F}([A, f]) = \bar{F}([B, g])$ を示せばよい。

まず、次の図式は可換である。

$$\begin{array}{ccccc}
 F(A \otimes Y \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{A \otimes Y, Y}} & F(A \otimes Y) \times F(Y) & \xleftarrow{\mu_{A, Y} \times F(Y)} & F(A) \times F(Y) \times F(Y) \\
 \uparrow F(A \otimes \Delta_Y) & \swarrow \mu_{A, Y \otimes Y} & \swarrow F(A) \times \mu_{Y, Y} & \uparrow F(A) \times \Delta_{F(Y)} & \\
 & F(A) \times F(Y \otimes Y) & & & \\
 & \swarrow F(A) \times F(\Delta_Y) & & & \\
 F(A \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{A, Y}} & F(A) \times F(Y) & &
 \end{array}$$

この図式の外側の五角形が可換であることが分かる。すると、次の図式も可換であることが分かる。

$$\begin{array}{ccccccc}
 & & F(A \otimes Y \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{A \otimes Y, Y}} & F(A \otimes Y) \times F(Y) & \xleftarrow{\mu_{A, Y} \times F(Y)} & F(A) \times F(Y) \times F(Y) \\
 & \nearrow \Delta & \downarrow F(k \otimes Y) & \downarrow \mu_{A, Y} & \downarrow F(k) \times F(Y) & \searrow F(A) \times \Delta_{F(Y)} & \searrow \pi_3 \\
 F(X) & \xrightarrow{F(f)} & F(A \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{A, Y}} & F(A) \times F(Y) & & \\
 & \searrow F(g) & \downarrow F(k) & \downarrow \mu_{A, Y} & \downarrow F(k) \times F(Y) & \searrow \pi_2 & \searrow \pi_3 \\
 & & F(B \otimes Y \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{B \otimes Y, Y}} & F(B \otimes Y) \times F(Y) & \xleftarrow{\mu_{B, Y} \times F(Y)} & F(B) \times F(Y) \times F(Y) \\
 & \nearrow \Delta & \downarrow F(k \otimes Y) & \downarrow \mu_{B, Y} & \downarrow F(k) \times F(Y) & \searrow F(B) \times \Delta_{F(Y)} & \searrow \pi_3 \\
 & & F(B \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{B, Y}} & F(B) \times F(Y) & & \\
 & & \downarrow F(k) & \downarrow \mu_{B, Y} & \downarrow F(k) \times F(Y) & \searrow \pi_2 & \searrow \pi_3 \\
 & & F(Y) & & & &
 \end{array}$$

この図式の手前上辺と手前下辺は等しいことが分かるので、 $\bar{F}([A, f]) = \bar{F}([B, g])$ である。これで関手 \bar{F} の well-defined 性が示された。

また \bar{F} のモノイド関手としての構造の同型 $\bar{\mu}_{\bar{F}(\bar{X}), \bar{F}(\bar{Y})} : \bar{F}(\bar{X}) \times \bar{F}(\bar{Y}) \rightarrow \bar{F}(\bar{X} \otimes \bar{Y})$ と $\bar{\varepsilon} : 1 \rightarrow \bar{F}(\bar{I})$ を $\bar{\mu}_{\bar{F}(\bar{X}), \bar{F}(\bar{Y})} := \mu_{F(X), F(Y)}$ 、 $\bar{\varepsilon} := \varepsilon$ と定める。すると $(\bar{F}, \bar{\mu}, \bar{\varepsilon})$ は確かに強モノイド関手である。

(ii) 関連関手 $F : \mathcal{R} \rightarrow \mathcal{D}$ に対し、 $H_{\mathcal{R}} \triangleright \bar{F} = F$ であることを示す。 $H_{\mathcal{R}} \triangleright -$ も $-$ も対象上何も操作しないので、対象の対応が等しいことは直ちに分かる。よって射の対応だけ見ればよい。

$f : X \rightarrow Y$ in \mathcal{R} を1つ取り固定する。 $(H_{\mathcal{R}} \triangleright \overline{F})(f)$ と $F(f)$ が等しいことを示す。

$$\begin{aligned}
& (H_{\mathcal{R}} \triangleright \overline{F})(f) \\
&= \overline{F}(H_{\mathcal{R}}(f)) \\
&= \overline{F}([1, f']) \\
&= F(f') \triangleright \mu_{I, Y}^{-1} \triangleright \pi_{F(I), F(Y)} \\
&= F(f') \triangleright \mu_{I, Y}^{-1} \triangleright (!_{F(I)} \times F(Y)) \triangleright \rho_{F(Y)} \\
&= F(f') \triangleright \mu_{I, Y}^{-1} \triangleright (\varepsilon \times F(Y))^{-1} \triangleright \rho_{F(Y)} \\
&= F(f') \triangleright F(\rho_Y) \triangleright \rho_{F(Y)}^{-1} \triangleright \rho_{F(Y)} \\
&= F(f) \triangleright \rho_{F(Y)}^{-1} \triangleright \rho_{F(Y)} \\
&= F(f)
\end{aligned}$$

である（下記図式参照）。これで示された。

$$\begin{array}{ccccccc}
F(X) & \xrightarrow{F(f')} & F(I \otimes Y) & \xleftarrow{\mu_{1, Y}} & F(I) \times F(Y) & \xrightarrow{\pi_{F(I), F(Y)}} & F(Y) \\
& \searrow F(f) & \downarrow F(\rho_Y) & & \varepsilon \times F(Y) \uparrow \downarrow ! \times F(Y) & & \nearrow \rho_{F(Y)} \\
& & F(Y) & \xleftarrow{\rho_{F(Y)}} & 1 \times F(Y) & &
\end{array}$$

(iii) (強) モノイド函手 $G = (G, \nu, \zeta) : \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$ に対し、 $\overline{H_{\mathcal{R}} \triangleright G} = G$ であることを示す。 $H_{\mathcal{R}} \triangleright -$ も \equiv も対象上何も操作しないので、対象の対応が等しいことは直ちに分かる。よって射の対応だけ見ればよい。 $H_{\mathcal{R}} \triangleright G =: (H_{\mathcal{R}} \triangleright G, \mu, \varepsilon)$ と置く。 $\mu_{X, Y} = \nu_{H(X), H(Y)} \triangleright G(\bar{\mu}_{X, Y})$, $\varepsilon = G(e) \triangleright \zeta$ である。

$[A, f] : \bar{X} \rightarrow \bar{Y}$ in \mathcal{C} を1つ取り固定する。 $\overline{H_{\mathcal{R}} \triangleright G}([A, f]) = G([A, f])$ を示す。

$$\begin{aligned}
& \overline{H_{\mathcal{R}} \triangleright G}([A, f]) \\
&= (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(f) \triangleright \mu_{X, Y} \triangleright \pi \\
&= (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(f) \triangleright \nu_{H(X), H(Y)} \triangleright G(\bar{\mu}_{X, Y}) \triangleright \pi
\end{aligned}$$

$\overline{H_{\mathcal{R}} \triangleright G}([A, f])$ は次の合成に等しい：

$$(H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(X) \xrightarrow{(H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(f)} (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(A \otimes Y) \xrightarrow{\cong} (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(A) \times (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(Y) \xrightarrow{\pi} (H_{\mathcal{R}} \triangleright G)(Y).$$

整理すればこれは

$$G(X) \xrightarrow{G([1, f'])} G(A \otimes Y) \xrightarrow{\cong} G(A) \times G(Y) \xrightarrow{\pi} G(Y)$$

に等しい。 G は cartesian だったのでこれは

$$G(X) \xrightarrow{G([1, f'])} G(A \otimes Y) \xrightarrow{G(\pi)} G(Y)$$

に等しい。これが $G([A, f])$ に等しいことを示すためには、 $[A, f]$ が次と等しいことを言えばよい：

$$X \xrightarrow{[1, f']} A \otimes Y \xrightarrow{\pi} Y.$$

これは $\Lambda(\mathcal{R})$ における射影の定義を見れば直ちに分かる。

□

§ 5. モノ射の成す関連圏からの復元

構成 Λ を考えたもともとの動機は、デカルト圏 \mathcal{C} に対し、 $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}] \cong \mathcal{C}$ であろう、という直感であった。本節ではこれを示す。より一般に、デカルト圏 \mathcal{C} に対し、 \mathcal{C} の「よい関連部分圏」に対し $\Lambda[\mathcal{R}] \cong \mathcal{C}$ となることの証明を与える。まずは「よい関連部分圏」を定義する。よい関連部分圏とは、全てのグラフを持つような関連部分圏のことである。

定義 5.1：よい関連部分圏

\mathcal{C} をデカルト圏とする。 \mathcal{C} の部分圏 \mathcal{R} が**よい関連部分圏**であるとは、 \mathcal{R} が \mathcal{C} の全ての対象を持ち、 \mathcal{C} の任意の射 $f: X \rightarrow Y$ に対し、 f のグラフ $(id_X, f): X \rightarrow X \times Y$ が \mathcal{R} に属することをいう。

定理 5.2： $\Lambda[\mathcal{R}] \cong \mathcal{C}$

\mathcal{C} をデカルト圏とし、 \mathcal{R} を \mathcal{C} のよい関連部分圏とする。このとき、 $\Lambda[\mathcal{R}] \cong \mathcal{C}$ である。包含関手 $i: \mathcal{R} \rightarrow \mathcal{C}$ から Λ の普遍性により誘導される関手 $\bar{i}: \Lambda[\mathcal{R}] \rightarrow \mathcal{C}$ は圏同型である。

Proof. 簡単のため、 $\Lambda := \Lambda[\mathcal{R}]$ と置く。誘導される関手 \bar{i} が対象上全単射であることは、 i がそうであることと \bar{i} の定義から明らか。よって \bar{i} が忠実充満であることを示せばよい。

$X, Y \in \mathcal{C}$ を取る。 $(\bar{i})_{X,Y}: \Lambda(X, Y) \rightarrow \mathcal{C}(X, Y)$ が全単射であることを示す。3 ステップに分けて示す。

- (i) 逆写像となるべき写像 $\psi: \mathcal{C}(X, Y) \rightarrow \Lambda(X, Y)$ を構成する。
- (ii) $\psi \triangleright (\bar{i})_{X,Y} = id$ であることを示す。
- (iii) $(\bar{i})_{X,Y} \triangleright \psi = id$ であることを示す。

(i) 逆写像となるべき写像 $\psi: \mathcal{C}(X, Y) \rightarrow \Lambda(X, Y)$ を構成する。 $\psi(f) := [X, (id_X, f)]$ と置く。これが逆であることを示す。

(ii) $\psi \triangleright (\bar{i})_{X,Y} = id$ であることを示す。 $f: X \rightarrow Y$ in \mathcal{C} を取り固定する。 $(\bar{i})_{X,Y}(\psi(f)) = f$ in \mathcal{C} であることを示す。

$$\begin{aligned}
 & (\bar{i})_{X,Y}(\psi(f)) \\
 &= (\bar{i})_{X,Y}([X, (id_X, f)]) \\
 &= (id_X, f) \triangleright \pi_Y \\
 &= f
 \end{aligned}$$

以上で示された。

(iii) $(\bar{i})_{X,Y} \triangleright \psi = id$ であることを示す。 $[A, f]: X \rightarrow Y$ in Λ を取り固定する。 $\psi(\bar{i}_{X,Y}([A, f])) =$

$[A, f]$ in Λ であることを示す。

$$\begin{aligned}
& \psi((\bar{i})_{X,Y}([A, f])) \\
&= \psi(f \triangleright \pi_Y) \\
&= [X, (id_X, f \triangleright \pi_Y)] \\
&= [X \times A, (id_X, f \triangleright \pi_Y) \triangleright ((id_X, f \triangleright \pi_A) \times Y)] \quad (\text{命題 3.1.3 より}) \\
&= [X \times A, (id_X, f \triangleright \pi_Y, f \triangleright \pi_A)] \\
&= [X \times A, (id_X, f)] \\
&= [X \times A, \Delta_X \triangleright (X \times f)] \\
&= [A, f] \quad (\text{補題 3.2.3 より})
\end{aligned}$$

以上で示された。 □

このように、デカルト圏 \mathcal{C} の全てのグラフを持つ \mathcal{C} の関連部分圏 \mathcal{R} は、必ず $\Lambda[\mathcal{R}] \cong \mathcal{C}$ となる。冒頭で述べた $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}] \cong \mathcal{C}$ であることは、ここから直ちに従う。

系 5.3 : $\Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}] \cong \mathcal{C}$

\mathcal{C} をデカルト圏とする。

このとき、包含関手 $i_{\mathcal{C}} : \mathcal{C}^{\text{mono}} \rightarrow \mathcal{C}$ から、 Λ の普遍性によりのびる関手 $\bar{i}_{\mathcal{C}} : \Lambda[\mathcal{C}^{\text{mono}}] \rightarrow \mathcal{C}$ は圏同型である。

Proof. $\mathcal{C}^{\text{mono}}$ は \mathcal{C} のよい関連部分圏であることから従う。 □

この他にも、よい関連部分圏の例として、§2 節で述べた分裂モノ射の成す関連部分圏や、多様体と埋め込みの成す関連圏などが挙げられる。これらの例についても、定理 5.2 の系として、操作 Λ を施せば元の圏が復元できることが分かる。

§ 6. まとめと今後の課題

・本論文では、2-圏論的議論を避けるために strict な議論を用いた。しかし、本論文の主張は本来 2-圏的なものであるべきである。本論文の主張を 2-圏論的に書き直すことは今後の課題である。

・関連圏の「複製」構造は、前述のとおり "lax-universality" とでも呼ぶべきものである。この "lax-universality" の概念は比較的容易に一般化できる。既によく知られる "weak-universality" より強い概念であり、一般的に言えることが見つかる可能性がある。真の universality でなくとも

十分豊かな性質を示すことは関連圏の姿から窺い知ることができるため、様々な普遍性についてその lax 版を調べてみることは有益であることが示唆される。

§ 7. 謝辞

§ 8. Reference

References

- [BW90] Michael Barr and Charles Wells, *Category theory for computing science*, vol. 1, Prentice Hall New York, 1990.
- [Fox76] Thomas Fox, *Coalgebras and cartesian categories*, Communications in Algebra **4** (1976), no. 7, 665–667.
- [HS19] Mathieu Huot and Sam Staton, *Universal properties in quantum theory*, arXiv preprint arXiv:1901.10117 (2019).
- [HT12] C. Hermida and R.D. Tennent, *Monoidal indeterminates and categories of possible worlds*, Theoretical Computer Science **430** (2012), 3–22, Mathematical Foundations of Programming Semantics (MFPS XXV).
- [Jac94] Bart Jacobs, *Semantics of weakening and contraction*, Annals of Pure and Applied Logic **69** (1994), no. 1, 73–106.
- [Jac10] Bart Jacobs, *Convexity, duality and effects*, Theoretical Computer Science (Berlin, Heidelberg) (Cristian S. Calude and Vladimiro Sassone, eds.), Springer Berlin Heidelberg, 2010, pp. 1–19.
- [Lam72] Joachim Lambek, *Deductive systems and categories. III. Cartesian closed categories, intuitionist propositional calculus, and combinatory logic*, Toposes, algebraic geometry and logic (Conf., Dalhousie Univ., Halifax, N.S., 1971), Lecture Notes in Math., vol. Vol. 274, Springer, Berlin-New York, 1972, pp. 57–82. MR 349356
- [Mac63] Saunders MacLane, *Natural associativity and commutativity*, Rice Institute Pamphlet-Rice University Studies **49** (1963), no. 4.
- [Pet02] Zoran Petrić, *Coherence in substructural categories*, Studia Logica **70** (2002), no. 2, 271–296.

- [Ten90] R.D. Tennent, *Semantical analysis of specification logic*, Information and Computation **85** (1990), no. 2, 135–162.